

「浮世絵の素顔に迫る」～知られざる浮世絵の世界～第二弾

2018年9月14日（金）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

9月14日（金）13:35～17:00に表参道の東京ウイメンズプラザに於いて、JGA 主催による第一支部「浮世絵」研修が実施されました。日本女子大学名誉教授、国際浮世絵学会常任理事としてご活躍されている及川茂先生を講師にお迎えし、総勢48名（JGA 正会員39名、非会員6名、運営委員3名）が参加し、遠くは福井県からもご参加頂きました。

講義の第一部（13:35～14:40）では、ジャポニズムの様々な側面と題し、ヨーロッパで浮世絵を受け入れ始めた19世紀後半の時代背景と日本の浮世絵事情をご説明頂きました。当時、絵画の主流は古典的で閉塞感を感じていたヨーロッパ人にとって、大胆な構図で一般庶民を生き生きと描いた浮世絵や柱絵のような縦長の描き方は、日本では当たり前でも当時のヨーロッパ人にとっては、斬新な印象を与えたようです。それがマネ、モネ、ゴッホ、ゴッガン、また、日本人にはあまり馴染みのない画家までも浮世絵の影響を受けたり、更には絵画だけでなく、ロイヤルコペンハーゲンのアートディレクターとなった、アーノルド・クローにまで影響を及ぼしているとのことでした。これだけヨーロッパでは浮世絵が狩野派や琳派以上に評価されているながら、日本での浮世絵に対する評価は、版画であるがゆえに依然として低く、逆に狩野派・琳派といった、伝統的な絵画が重要視され、ヨーロッパとは逆であるとのことでした。

第2部（14:55～16:00）では、浮世絵の諸相と問題点と題して、浮世絵本来の主題に戻り、各浮世絵師の特徴と、得意分野、また、浮世絵の歴史的な変遷についてお話しされました。美人画は喜多川歌麿、柱絵、錦絵は鈴木晴信、風景画は葛飾北斎、同じ風景画でも人を多く描いているのは歌川広重、また、「SHARAKU」を1910年にミュンヘンで出版した、ユリウス・クルトは、当時全く無名であった写楽を最大限に評価し、オランダのレンブラント、スペインのベラスケスと共に3大肖像画家と提唱した事を興味深いと感じた方が多くいらっしゃいました。

またこの後は質疑応答を交えながら、浮世絵が具体的にどのようなプロセスで作られるのか、版元・絵師・彫り師・刷り師がどのような役割分担をしていたのか、大量に摺られた浮世絵は初版から次第に色調や細部が変わる事があるがそれはどういう事なのか、また、資料として付けた神保町の浮世絵店の特徴をお話しして頂けるなど、大変広範囲に話が及びました。

及川先生のお話しからは、浮世絵の真価を伝えたいという情熱が感じられ、私たちも思わずお話しに引き込まれ、通訳ガイドとして、また日本人として、浮世絵の価値を正しく理解し、今後のガイド業務にはその真価を今までとは違った視点で世界の人々に伝えなければならぬと多くの方が心新たに思われたようでした。